

## 魚 類

1	タイリクバラタナゴ	被害甚大種	11	ソウギョ	要注目種
2	オオクチバス	被害甚大種	12	ゲンゴロウブナ(ヘラブナ)	要注目種
3	コクチバス	被害甚大種	13	ヌマチチブ(京都府南部)	要注目種
4	ブルーギル	被害甚大種	14	カムルチー	要注目種
5	チャネルキャットフィッシュ	被害甚大種	15	ナイルティラピア	要注目種
6	カダヤシ	被害甚大種	16	タウナギ	要注目種
7	スポテッドガー	被害危惧種			
8	タイリクスズキ	準被害危惧種			
9	ニジマス	要注目種			
10	アマゴ	要注目種			

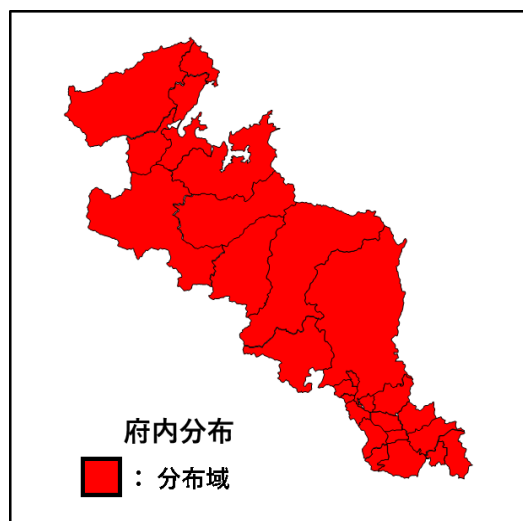
分類群	魚類
1. 京都府内の外来生物の特徴	日本海側の海面における外来魚の侵入に関する実態は明らかではないが、養殖場から逸出したと見られるタイリクスズキが得られたという情報もある。内水面、とりわけ京都府南部におけるブラックバスとブルーギルがもたらす外来魚への被害は重篤で、その態様は近接する琵琶湖水系のそれに類似する。ソウギョ、タイリクバラタナゴ、カムルチー、タウナギなどの中国大陸・朝鮮半島原産の国外外来魚の分布の拡大の速度は鈍化して久しく、すでに安定期に入ったものと思われる。一方、外来生物法の実施強化に伴い、ガーパイクなどの熱帯魚の野外へのペット放棄も後を絶たない。国内外来魚の侵入状況については、京都市を中心にある程度情報が得られているが、府全体の状況は把握できていないのが現状である。
2. 基準選定の考え方	過去に京都府レッドデータブック作成のために編成された調査班および近畿大学が蓄積してきた調査記録に文献情報を加え、外来魚リストを作成。京都府基準をもとにタイプ分けを行った。
3. タイプ変更・新規追加種について	今回、コクチバスの定着が確認されたため、AbからAaに変更した。さらに新たにチャネルキャットフィッシュの稚魚・幼魚の採集情報を得た。繁殖が次年度以降も継続するか、その動向を見据える必要があり、本種をAbに位置付けた。他地域の被害状況を鑑みるならば、両種が京都府内で定着すれば、水産業はもとより水圏の生物多様性に甚大な被害をもたらすことは明白である。両種は侵入初期にあり、予断を許さない状況にあると言える。
4. 対策	現在までのところ、どの外来魚に対しても実効性のある対策はなされていない。コクチバスもチャネルキャットフィッシュもアメリカ原産であるが、原産地から直接もたらされたものではなく、日本国内の他地域から導入されたことは議論の余地はない。今後、京都府から他府県へ2次的に拡散することも危惧される。京都府のみならず、琵琶湖・淀川水系など水系ネットワークでつながる自治体が協調して、防除に当たることが不可欠である。さらにヒメダカによるミナミダカへの、アマゴによるヤマメへの遺伝的攪乱、飼育型コイおよび金魚の無秩序な野外放出なども脅威となっている。国内外来魚や人工外来魚による実態調査も実施するするとともに、外来種問題をめぐり、府民への啓発活動を強化してゆく必要があるだろう。
5. 備考	

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	タイリクバラタナゴ	学名	<i>Rhodeus ocelatus ocelatus</i>	目科名	コイ目コイ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Aa	国リスト カテゴリー	重点対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Aa	原産地	中国、朝鮮半島、台湾
	導入・侵入年代	1942年	導入・侵入原因	中国・長江九江付近から関東地方に移殖されたソウギョ・ハクレン種苗に混入。		
②分布範囲	全国	平野部を中心にほぼ全国的に分布。				
	府内	主要な河川の止水域、池沼、農業水路。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input checked="" type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input checked="" type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input checked="" type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	他のタナゴ類くらべれば、より止水域に多い。付着藻類を好み、植物食に偏った雑食性。産卵期は3～9月。メスは長い産卵管を使って、電球型の完熟卵をタガイやドブガイなどの淡水二枚貝の鰓葉に産みつける。仔魚は約3週間貝内で保育される。早く成熟し、1年に2世代が見られる。					
⑤近似種との見分方	外観は日本固有亜種のニッポンバラタナゴに酷似するが、腹鰭の前縁がグアニンによって白く縁取られることで、黒いニッポンバラタナゴから区別される。					
⑥被害状況	ニッポンバラタナゴと同種の関係にあるため、タイリクバラタナゴが侵入すると容易に交雑する。交雑個体群は最初は中間型を示しているが、世代交代が進むとタイリクバラタナゴだけになる。このような置換現象は、ニッポンバラタナゴの元分布域の西日本で起こっている。深泥池では、1970年代前半に琵琶湖から本亜種が移殖された結果、ニッポンバラタナゴが絶滅している。産卵用母貝と生息場所をめぐり止水性の他の在来タナゴ類と種間関係にあり、平安神宮内の池ではイチモジタナゴが大きな影響を受けている。近年では後から侵入してきたオオクチバスやブルーギルの食害により、日本各地でタイリクバラタナゴさえも2次的に減少している。					
⑦必要な防除対策	ニッポンバラタナゴの生息地へタイリクバラタナゴを移殖しないことはもとより、タイリクバラタナゴの自然侵入を防ぐような隔離施策しかない。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	長田芳和, 1980. タイリクバラタナゴー純血の危機. 川合禎次ほか(編), 日本の淡水生物ー侵略と攪乱の生態学. Pp.147-153. 東海大学出版会, 東京. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

(執筆者) 細谷和海

分布図



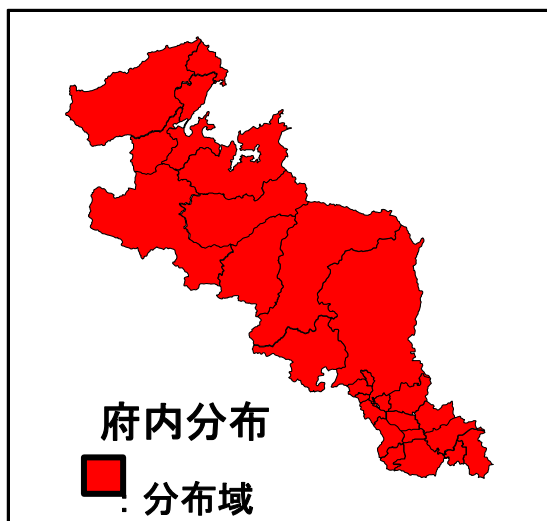
©細谷和海

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	オオクチバス	学名	<i>Micropterys salmoides</i>	目科名	スズキ目サンフィッシュ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Aa	国リスト カテゴリー	緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Aa	原産地	アメリカ合衆国
	導入・侵入年代	1925年(箱根・芦ノ湖)	導入・侵入原因	釣りを目的とした移殖		
②分布範囲	全国	淡水の止水域を中心にほぼ全国的に分布する。				
	府内	主要な河川の止水域、ダム湖、道路に近いため池ならどこでも見られる。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] ■生態系被害、 ■農林水産業被害、 □人身・健康被害、 □生活被害 [影響内容] ■上位捕食者となる、 □植生への影響、 ■競合・駆逐、 □遺伝子かく乱、 □在来種への病気・寄生虫の媒介、 □土壌・環境攪乱、 ■希少種・固有種への影響 [性質特性] ■定着性が高い、 ■環境適応性が高い、 ■繁殖能力が高い、 □拡散能力が高い [被害程度] ■対策の緊急性が高い、 ■被害が大きい、 □特殊性、 ■回復困難性					
④生態的特性	池沼や河川の流の緩やかな浅瀬に生息する。魚食性であるが、食性の幅は広い。産卵期は5月上旬－7月上旬（水温13－15℃）、府内では6月が盛期と考えられる。オスは、水草の生えた浅い砂礫底に産卵床を作り、卵・稚子を保護する。1巣あたりの産着卵は数百から1万粒ほど。					
⑤近似種との見分方	同属のククチバスとは口が大きく、横列鱗数が少なく、体側に横帯を持つことで区別される。ククチバスでは、上顎後端は眼のほぼ中央下にあり、横列鱗数は11－13枚、体側に薄い横帯を備える。					
⑥被害状況	成魚のみならず、稚魚期から他魚種の仔稚魚を捕食する。特に池沼など小規模な閉鎖水域に侵入すると、タナゴ類やモロコ類などの小型の在来種が絶滅することが多い。ブルーギルが同時に侵入すると、在来種の絶滅速度は加速されるようである。深泥池では、両種が移殖された1985年以降、在来種の半数が絶滅している。このような現象は、府内の他の池沼においても見られるものと考えられる。					
⑦必要な防除対策	ため池などの小さな水域ではかいぼりや水干しを行い、大きな水域では人工産卵床による繁殖阻害、仔稚魚をまとめて採集するのが効果的である。特に、繁殖期に個体を駆除することが肝要。市民を主体とした駆除体制を構築することが望まれる。また、生物多様性保全の視点から、バス釣りに対して毅然とした姿勢を示し、次代を担う子供達に適切な環境教育を推進する必要がある。近年、琵琶湖では駆除の効果が徐々に表れ、コイ科数種では回復の兆しが見られるようになった。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	細谷和海. 2006. ブラックバスはなぜ悪いのか. 細谷和海・高橋清孝（編）, ブラックバスを退治する. pp.3-12. 恒星社厚生閣, 東京. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp. 全国内水面漁業共同組合連合会. 1992. ブラックバスとブルーギルのすべて. 平成3年度水産庁委託事業, 221pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	■IUCNワースト100、 ■日本生態学会ワースト100、 ■特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図





## 京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	コクチバス	学名	Micropterys dolomieu	目科名	スズキ目サンフィッシュ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Aa	国リスト カテゴリー	緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Ab	原産地	北米東部
	導入・侵入年代	不明	導入・侵入原因	導入経緯は不明、平成3年長野県野尻湖で初確認		
②分布範囲	全国	1990年代は数県であったのが、2003年には37都道府県で確認され、現在では本州の広域で定着している。				
	府内	木津川ではすでに定着している。一方、桂川水系では成魚は釣獲されているが、繁殖は確認されていない。その他、京都市内で目撃情報がある。				
③選定理由 ※該当にチェック	<p>[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/>生態系被害、 <input checked="" type="checkbox"/>農林水産業被害、 <input type="checkbox"/>人身・健康被害、 <input type="checkbox"/>生活被害</p> <p>[影響内容] <input checked="" type="checkbox"/>上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/>植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/>競合・駆逐、 <input type="checkbox"/>遺伝子かく乱、 <input checked="" type="checkbox"/>在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/>土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/>希少種・固有種への影響</p> <p>[性質特性] <input type="checkbox"/>定着性が高い、 <input type="checkbox"/>環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/>繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/>拡散能力が高い</p> <p>[被害程度] <input checked="" type="checkbox"/>対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/>被害が大きい、 <input checked="" type="checkbox"/>特殊性、 <input checked="" type="checkbox"/>回復困難性</p>					
④生態的特性	オオクチバスに比べて、低水温、流水環境にも適応できる。河川の上流部から中下流部、池沼にも生息する。動物食性で最大体長の66%までの魚類（ウグイ）を捕食し、1日に体重の30%程度を摂餌する。餌は、魚類、甲殻類、水生昆虫、陸生昆虫など。繁殖期は5月～7月。産卵数は1シーズンでひとメス5000から14000粒。オスが産卵床を保護する。成魚の体長は30cm～50cm。					
⑤近似種との見分方	オオクチバスに酷似するが、オオクチバスは上顎後端が眼よりも後ろにくるのに対して、コクチバスは上顎後端が目よりも前にあること、コクチバスの背鰭、臀鰭基部には鱗がないことなどから区別することが可能。					
⑥被害状況	オオクチバスよりも低水温また、流水環境での生息に適しているため、イワナ、アマゴなどが生息する河川の上流域、アユなどが生息する中流域が主生息場所にあたる。これによりオオクチバスがあまり進出していなかった生息環境での在来生物が捕食により影響を受ける可能性が高い。京都府下での現時点の被害は不明である。					
⑦必要な防除対策	産卵床の破壊による稚仔魚の駆除、刺し網、投網、釣り等による捕獲が効果的。何よりも、新たな水系へのコクチバスの侵入を防ぐことが重要である。					
⑧改訂の理由	木津川では2008年以降卵、仔稚魚を含め継続的に採集されている。京都府内での定着は確実であり、在来生態系への被害と合わせAaにカテゴリーを改訂する。					
⑨参考文献	小西雅樹・川瀬成吾, 2014. 淀川水系木津川への告知バスの侵入. 魚類学雑誌, 61(1):46-48. 農林水産技術会議事務局編, 2003. 外来魚コクチバスの生態学的研究及び繁殖抑制技術の開発. 農林水産技術会議事務局研究成果第417. 125 pp. 自然環境研究センター, 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp. 淀大我・井口恵一朗, 2004. バス問題の経緯と背景. 水研センター研報 第12号 p.10-24					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図

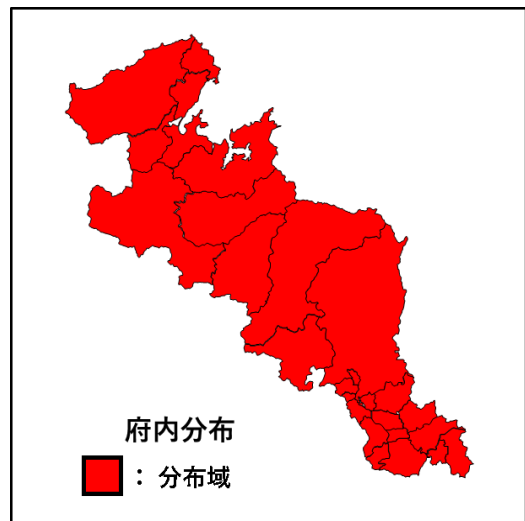


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ブルーギル	学名	<i>Lepomis macrochirus</i>	目科名	スズキ目サンフィッシュ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Aa	国リスト カテゴリー	緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Aa	原産地	-
	導入・侵入年代	1960年	導入・侵入原因	産業対照種として水産研究機関により各地に移殖		
②分布範囲	全国	ほぼ全国的に分布				
	府内	主要な河川の止水域、農業水路、道路に近いため池ならどこでも見られる。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] ■生態系被害、 ■農林水産業被害、 □人身・健康被害、 □生活被害 [影響内容] □上位捕食者となる、 □植生への影響、 ■競合・駆逐、 □遺伝子かく乱、 □在来種への病気・寄生虫の媒介、 □土壌・環境攪乱、 ■希少種・固有種への影響 [性質特性] ■定着性が高い、 ■環境適応性が高い、 ■繁殖能力が高い、 □拡散能力が高い [被害程度] ■対策の緊急性が高い、 ■被害が大きい、 □特殊性、 ■回復困難性					
④生態的特性	池沼、河川下流域の流れの緩やかな場所で、水草が繁茂するような砂泥底の水面近くを泳ぐ。雑食性であるが、魚卵や稚魚も食べる。産卵期は6月～8月、オオクチバスより1ヶ月ほど遅れる。オスは、浅い砂礫底に産卵床を作り、卵・稚子を保護する。1回あたりの産卵数は2万～6万。府内への侵入の主な理由は、オオクチバスとのセット放流、京都疎水と宇治川水系を通じた拡散と考えられる。					
⑤近似種との見分方	オオクチバスやコクチバスとは、より体が小さくて平べったく、眼状暗色斑を備えることで区別できる。在来種のおヤナミとは生息場所が異なる。おヤナミは、河川の中流域で多少とも流れがあるところに生息する。					
⑥被害状況	産卵期が在来魚と重なるため、ブルーギル稚魚による卵仔稚への食害、動物プランクトン餌量の独占などにより、在来魚は繁殖阻害されていると思われる。特に池沼など小規模な閉鎖水域に侵入すると、タナゴ類、モロコ類、メダカなどの小型の在来種が絶滅することが多い。このような現象は、府内のどの池沼においても見られるものと考えられる。					
⑦必要な防除対策	ため池などの小さな水域ではかいぼりや水干しを行い、大きな水域では産卵床破壊による繁殖阻害、仔稚魚をまとめて採集するのが効果的である。特に、繁殖期に個体を駆除することが肝要。市民を主体とした駆除体制を構築することが望まれる。深泥池ではかご網による駆除が継続的になされている。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	自然環境研究センター、2019. 最新・日本の外来生物 平凡社、東京、591 pp. 寺島 彰、1980. ブルーギル-琵琶湖にも空いていた生態的地位. 川合禎次ほか（編）、日本の淡水生物-侵略と攪乱の生態学. Pp163-70. 東海大学出版会、東京. 全国内水面漁業共同組合連合会、1992. ブラックバスとブルーギルのすべて. 平成3年度水産庁委託事業、221pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	■IUCNワースト100、 ■日本生態学会ワースト100、 ■特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図



## 京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	チャンネルキャット フィッシュ	学名	<i>Ictalurus punctatus</i>	目科名	ナマズ目アメリカ ナマズ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Ab	国リスト カテゴリー	緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	-	タイプ (2005)	-	原産地	北中米の淡水域
	導入・侵入年代	1971年	導入・侵入原因	ナマズ代用種としての養殖目的。		
②分布範囲	全国	宮城県から東京都にかけての東日本、岐阜県・愛知県から兵庫県にかけての東海・近畿地方、				
	府内	宇治川および木津川水系など淀川水系の河川域。木津川の個体の由来について、奈良県下にある布目ダムは本種の汚染源と見なされる。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] ■生態系被害、 ■農林水産業被害、 □人身・健康被害、 □生活被害 [影響内容] ■上位捕食者となる、 □植生への影響、 ■競合・駆逐、 □遺伝子かく乱、 □在来種への病気・寄生虫の媒介、 □土壌・環境攪乱、 ■希少種・固有種への影響 [性質特性] ■定着性が高い、 ■環境適応性が高い、 ■繁殖能力が高い、 □拡散能力が高い [被害程度] ■対策の緊急性が高い、 ■被害が大きい、 □特殊性、 ■回復困難性					
④生態的特性	河川の下流域、湖沼など流れの緩やかな泥底を好む。夜行性で、魚類、底生動物、水生植物、動物プランクトンなど食性の幅は広く、環境や季節的変動に応じて餌の種類を変える。霞ヶ浦での産卵期は5～7月、雌の体内卵数は数万に及ぶ。オスはオスは卵・仔稚魚を保護する。雌雄とも体長33cm、5歳以上になると成熟する。					
⑤近似種との見分方	4対8本の口ヒゲと脂ヒレを備えることからギギに類似するが、体は大きく最大で全長1.3mを超える。ギギと同サイズの幼魚は、体色が銀白色で体側に大きな黒斑が散在することでギギから識別できる。					
⑥被害状況	京都府内では今のところ被害に関する報告はない。霞ヶ浦では漁網を破り、ワカサギを貪食するなど水産魚への被害が出ている。また、湖内では本種の異常繁殖と在来タナゴ類が消滅したことが同機しており、何らかの影響を及ぼしている可能性がある。					
⑦必要な防除対策	今のところ手作業による個体レベルの除去以外、現実的な駆除方法はない。本種の府内への侵入は初期段階にあり、由良川など未侵入の水系へ拡散する前に阻止することが強く望まれる。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	藤田朝彦. 2019. チャンネルキャットフィッシュ. 細谷和海（編著）, pp. 234-235, 増補改訂 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京. 瀬能 宏（監修）. 2008. 日本の外来魚ガイド. 文一総合出版, 東京. 159 pp. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	□IUCNワースト100、 □日本生態学会ワースト100、 ■特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図





京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	カダヤシ	学名	<i>Gambusia affinis</i>	目科名	カダヤシ目カダヤシ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	重点対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Ba	原産地	アメリカ南部からメキシコ中部
	導入・侵入年代	1916年	導入・侵入原因	脳炎ウイルスやマラリア病原虫を媒介する蚊の駆除目的で、保健所により各地に移殖。		
②分布範囲	全国	平野部を中心にほぼ全国的に分布。				
	府内	京都府南部の池沼、農業水路。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] ■生態系被害、 □農林水産業被害、 □人身・健康被害、 □生活被害 [影響内容] □上位捕食者となる、 □植生への影響、 ■競合・駆逐、 □遺伝子かく乱、 □在来種への病気・寄生虫の媒介、 □土壌・環境攪乱、 ■希少種・固有種への影響 [性質特性] ■定着性が高い、 □環境適応性が高い、 ■繁殖能力が高い、 □拡散能力が高い [被害程度] ■対策の緊急性が高い、 □被害が大きい、 □特殊性、 ■回復困難性					
④生態的特性	池沼、農業用水など流れのない水域に生息する。河口近くの水たまりや運河など潮の影響を受ける水域でも見られる。動物食に偏った雑食性、和名はボウフラをよく食べることに因む。東京近辺の産卵期は5～10月。早く成熟し、1年に2世代が見られる。卵胎生で、メスは1腹で30～300尾の仔魚を産む。					
⑤近似種との見分方	外観はメダカに似るが、臀鰭基底が短いことで長いメダカから区別される。また、メスの腹部の形状とオスの交接脚の有無によっても、両種は見分けられる。メダカと生息域が重複することもあるが、メダカよりは高水温を好み、塩分濃度の高く、汚染が進んだような水域でも見られる。					
⑥被害状況	メダカより攻撃性が強いといわれる。生態的にメダカと同じ地位にあるため、条件がよいとメダカの生息地は一定の期間においてカダヤシに置換される。特に、池沼や農業用水などの小規模な閉鎖水域に侵入すると、メダカは絶滅することが多い。深泥池では、自治体により蚊の対策として本種が移殖された結果、メダカが絶滅している。その責任は問われるべきである。					
⑦必要な防除対策	メダカの生息地へカダヤシを違法放流しないことはもとより、カダヤシの自然侵入を防ぐような隔離施策を進める必要がある。					
⑧改訂の理由	カダヤシはメダカに比べてより暖かい水を好む。冬季の水温低下が抑制的に作用していたが、近年の気候変動は本種に有利な環境条件をもたらしている。また、兵庫県下では円山川河口域周辺でカダヤシが優勢となり、京都府の日本海側の湿地帯への拡散が懸念される。					
⑨参考文献	佐原雄二・幸地良仁、1980、カダヤシ-メダカカダヤシの生態、川合禎次ほか（編）、日本の淡水生物-侵略と攪乱の生態学、pp106-117、東海大学出版会、東京。 自然環境研究センター、2019、最新・日本の外来生物、平凡社、東京、591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	■IUCNワースト100、 ■日本生態学会ワースト100、 ■特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図

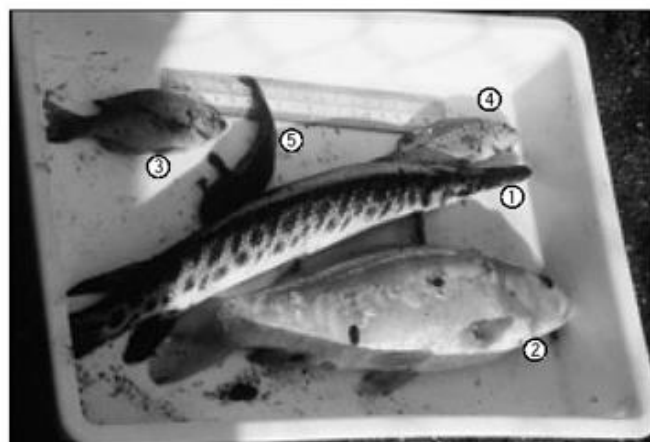




## 京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	スポットテッドガー	学名	Lepisosteus oculatus	目科名	ガー目ガー科
	カテゴリー (201)	被害危惧種	タイプ (201)	Ac	環境省 カテゴ	
	カテゴリー (2005)		タイプ (2005)		原産地	五大湖周辺からミシシッピー川を中心とするテキサス中央部、メキシコ湾岸部、フロリダ州西部まで
	導入年代	野外での確認は1980年代以降。	導入原因	観賞魚の野外遺棄。		
②分布範囲	全国	本州以南の各地				
	府内	1999年に京都疎水分流（哲学の道）から採集記録がある。飼育できなくなったことによる放棄個体と考えられる。				
③選定理由	[被害対象] ■生態系被害、□農林水産業被害、□人身・健康被害、□生活被害 [影響内容] ■上位捕食者となる、□植生への影響、□競合・駆逐、□遺伝子かく乱、 □在来種への病気・寄生虫の媒介、□土壌・環境攪乱、■希少種・固有種への影響 [性質特性] ■定着性が高い、■環境適応性が高い、□繁殖能力が高い、□拡散能力が高い [被害程度] □対策の緊急性が高い、□被害が大きい、□特殊性、■回復困難性					
※該当にチェック						
④生態的特性	通常、流れの緩やかな河川や湖沼に生息するが、条件が整えば汽水域にも侵入する。鰓の代わりに肺を備え、ときおり空気呼吸する。北中米における繁殖期は3～4月、産卵は水草帯で行われる。卵は毒性を示す。魚食性で水表面で静止し、餌魚を待ち構え、摂餌は早朝に行われるという。オスよりメスの方が大きくなる。					
⑤近似種との見分け	ガー科は体形が細長く、吻が著しく長く突出している。本種はアリゲーターガーとともに最も一般的なガー類である。スポットテッドガーは、体の背面と側面に数列からなる円い斑紋が縦に並びことで他魚種と区別できる。また、他のガー類に比べやや小型で、飼育下では全長70cmどまりのことが多い。					
⑥被害状況	今のところ実害は報告されていない。しかし、スポットテッドガーは、原分布域から判断して他のガー類に比べて低温耐性に優れると思われ、我が国の淡水域で繁殖に成功すれば定着は確実で、その食性から在来の生態系に大きな影響を及ぼすものと予想される。					
⑦必要な防除対策	本種は侵入初期段階にあるため、拡散・定着前に徹底した外来生物法の順守と外来種問題に関する啓発推進が強く望まれる。					
⑧改訂の理由	観賞魚として大きく成長するため、飼育できなくなった結果、野外へ放棄されることが後を絶たなかった。加えて平成30年4月1日の特定外来生物指定を受け、飼育に法的制限がかかったため、放棄に拍車がかかった。琵琶湖淀川水系では散発的に現認されており、今後、府内での発見事例は増えると思込まれる。ただし、今のところ繁殖は確認されていない。					
⑨参考文献	藤田朝彦, 2019. 特定外来生物に指定されたガー類. 細谷和海 (編著), p. 370, 増補改訂 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京. 自然環境研究センター, 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京, 591 pp.					
⑩特記事項	※該当にチェック <input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物 (外来生物法) <input type="checkbox"/> 緊急性 (侵入初期等)					

（執筆著） 細谷和海



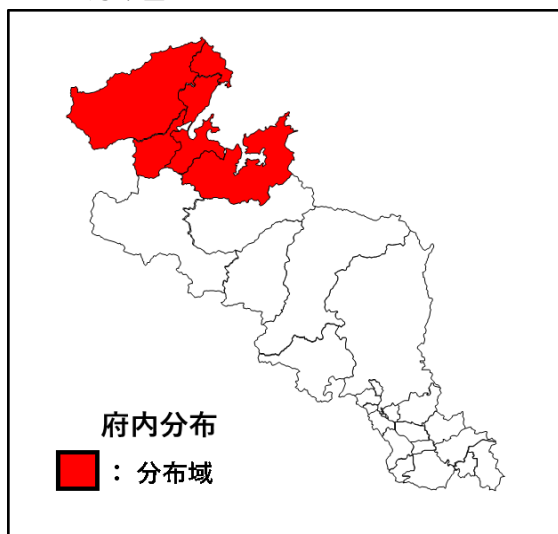
(外来魚) ①. スポテッド・ガー ②. コイ(飼育品種) ③. ブルーギル ④. オオクチバス  
 ⑤. ノマチチブ

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	タイリクスズキ	学名	<i>Lateolabrax maculatus</i>	目科名	スズキ目スズキ科
	カテゴリー (2019)	準被害危惧種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	-	タイプ (2005)	-	原産地	黄海, 渤海, 東シナ海と南シナ海の中国・台湾沿岸, トンキン湾
	導入・侵入年代	1989年	導入・侵入原因	海面養殖用網いけすからの逸散		
②分布範囲	全国	当初、瀬戸内海や紀伊半島南端から報告されたが、現在では房総半島以西の本州、四国、九州の沿岸部に広がっている。				
	府内	舞鶴、宮津、久美浜で採集されている。すでに若狭湾、日本海沿岸部に拡散していると思われる。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input checked="" type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input checked="" type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input checked="" type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	海域で繁殖するが、稚魚や幼魚は汽水域や淡水域にも侵入する。スズキと同様な生態を持つものと予想されるが、生息域から考えてより塩分濃度の低い泥質の環境を好むと思われる。高知県浦戸湾ではスズキが、流入河川ではタイリクスズキが多くなる傾向にあるという。スズキより成長速度が速く、そのことが養殖対象となる所以である。					
⑤近似種との見分方	スズキより対高が大きく、幼魚・未成魚に見られる体側の黒点が多いことを特徴とする。その大きさは時として瞳孔径に匹敵する。有明海には本種とスズキとの中間型の自然個体群が存在し、環境省版レッドリスト（2013）ではスズキの絶滅の恐れのある地域個体群に位置付けられている。					
⑥被害状況	種間競争により在来のスズキへの影響が懸念される。愛媛県宇和島市の来村川河口域ではすでにタイリクスズキに置換しているという。スズキとの生殖的隔離の程度は検証されていないが、交雑に由来すると思われる個体が各地で採集されており、スズキへの遺伝的かく乱が危惧される。					
⑦必要な防除対策	養殖目的に中国や台湾から輸入された種苗が、台風などの自然災害により逸出するリスクが最も高い。養殖業者への管理指導を徹底するとともに、逸出個体の駆除に関する具体策を立案する必要がある。特に、由良川河口域への侵入・定着を防ぐことが喫緊の課題となろう。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	細谷和海. 2019. 増補改訂 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京. 559 pp 瀬能 宏 (監修). 2008. 日本の外来魚ガイド. 文一総合出版, 東京. 159 pp. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp. 谷口順彦. 2009. 外来海産魚類の導入の現状とリスク管理. 海の外来生物-人間に攪乱された地球の海. 東海大学出版会, 秦野.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 中山耕至・細谷和海

分布図

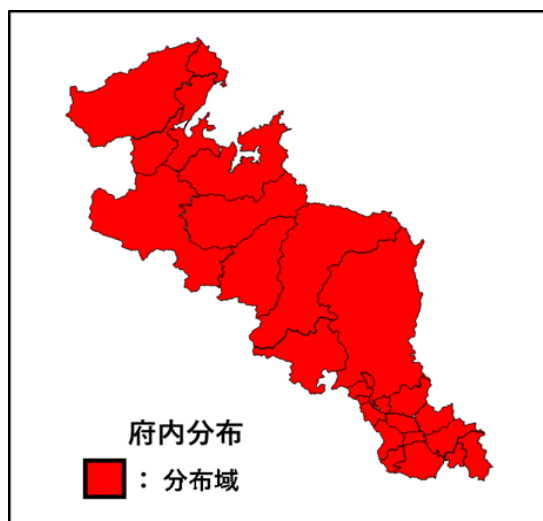


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ニジマス	学名	<i>Oncorhynchus mykiss</i>	目科名	サケ目サケ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ac	国リスト カテゴリー	産業管理外来種
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ac	原産地	カムチャッカ半島、アラスカ、バハカリフォルニア
	導入・侵入年代	1877年以降（国内） 府内は不明	導入・侵入原因	在来マス類の代替養殖種として		
②分布範囲	全国	九州以北の全国各地				
	府内	高野川、桂川、木津川、宇治川、由良川、大手川、竹野川、筒川、久美浜湾流入河川				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input checked="" type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	産卵期は、養殖されているものでは11～2月頃が多い。自然繁殖するところでは4月～6月に産卵行動が見られることが多い。河川で生育するものは水生や陸生の昆虫や環形動物、その他の小動物を餌とするが、大型になると魚食性を示す。					
⑤近似種との見分方	幼魚はパーマークを有し、ヤマメと混同されやすいが、背鰭や尾鰭などの黒点の数が著しく多いこと、 <input type="checkbox"/> が小さいこと、尻鰭の軟条数がヤマメの13～15本に対して8～12本と少ないことで区別できる。					
⑥被害状況	府内において自然繁殖しているケースは今のところ確認されていない。野外釣り堀やイベントで放流された個体が、河川に残り、他の生物に対して補食圧を高めたり、生態的地位を脅かす可能性がある。					
⑦必要な防除対策	安易な放流をやめ、在来サケ科魚類を見直し、個体群の回復を目指した生息環境の改善を図る。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	川那部浩哉・水野信彦、1989. 日本の淡水魚、山と溪谷社、東京。 村上興正・鷺谷いづみ（監修）、2002. 外来種ハンドブック、他人書館、東京。 自然環境研究センター、2019. 最新・日本の外来生物、平凡社、東京、591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input checked="" type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図

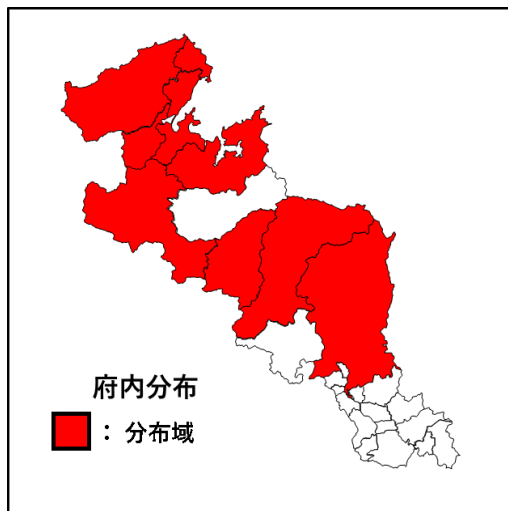


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	アマゴ	学名	<i>Oncorhynchus masou ishikawae</i>	目科名	サケ目サケ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ba	原産地	国内
	導入・侵入年代	不明（府）	導入・侵入原因	遊魚など		
②分布範囲	全国	自然分布域は、神奈川県以西の本州太平洋側、四国全域、大分県以北の九州瀬戸内海側の各河川				
	府内	由良川水系、丹後半島の河川、高野川、桂川（生息数の規模）普通				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input checked="" type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input checked="" type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	年間を通じて水温が20℃以下の渓流域に生息するが、日本海側に注ぐ河川では、中流域でも見られる。産卵は10月中旬から11月下旬にかけて行われる。孵化した仔魚は稚魚期まで産卵床内ですごし、3月から5月にかけて浮出する。水生や陸生の昆虫等を餌にしている。降海個体はサツキマスと呼ばれ、府内でも、日本海側に流入する河川で確認されている。					
⑤近似種との見分方	体側に7～11個のパーマークがあり、背側には小黒点、側線の上下から背部にかけては朱紅点が散在する。ヤマメとはこの朱紅点の有無により見分けられる。					
⑥被害状況	在来個体と放流個体の区別がつかず、地域的な遺伝的特性を不可逆的に損なう可能性がある。淵での攻撃的ななわばり行動が見られ、同種にとどまらず、他種にも攻撃をすることから、他種よりも優位になり、他の生物に対して補食圧を高めたり、競合する恐れがある。					
⑦必要な防除対策	放流をやめ、在来個体群を見直し、回復を図るために生息環境の改善を図る。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	川那部浩哉・水野信彦. 1989. 日本の淡水魚、山と渓谷社、東京. 村上興正・鷺谷いづみ（監修）. 2002. 外来種ハンドブック. 他人書館. 東京. 瀬能 宏（監修）. 2008. 日本の外来魚ガイド. 文一総合出版. 東京. 159 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図



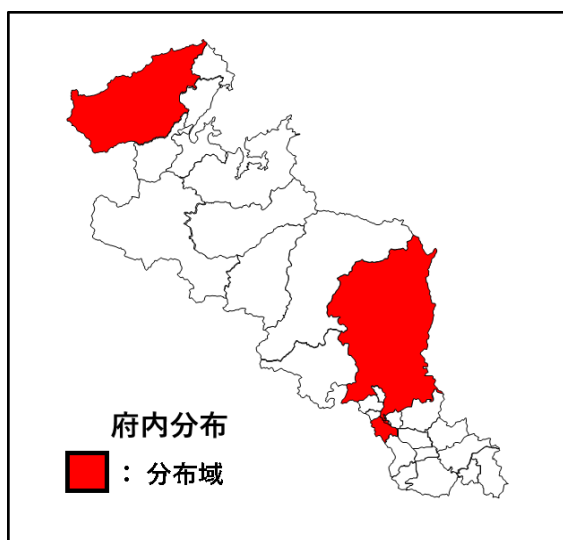


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ソウギョ	学名	<i>Ctenopharyngodon idellus</i>	目科名	コイ目コイ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ac	国リスト カテゴリー	その他の総合対策 外来種
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ac	原産地	中国
	導入・侵入年代	1878年(国内)近 年、府下では1990 年頃に放流	導入・侵入原因	当初は食用に放流、現在では除草用に放流されている。		
②分布範囲	全国	全国で放流されている				
	府内	2000年以降の有力な確認情報は京丹後市と京都市の湖沼、淀川三川谷流付近。 (生息数の規模)少ない				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input checked="" type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響、 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	純淡水魚。自然繁殖は流程の長い利根川水系に限られが、生育は湖沼や河川で可能。寿命は10年とされるが、条件が揃えば20年以上生きる。全長は1mを超える。草食性で、水生植物を多量に食す					
⑤近似種との見分方	在来の同属種はいない。コイに似るが口ひげは無く、背鰭が小さく、眼が下方にある。					
⑥被害状況	大形のため、水生植物を多量に食すので、希少な水生植物や有用な水生植物への被害が甚大である。府内では繁殖はしていないが、寿命が長いために、被害は長期にわたる。					
⑦必要な防除対策	被害が顕著な場合は捕獲する必要がある。 除草目的で放流する場合は、池や堀などの閉鎖性の高い水域に限り、他へ移出しないように管理が必要である。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	京都芸術大学(2002)ソウギョバスターズ,京都芸術大学広報vol2. 村上興正・鷺谷いづみ監(2002)外来種ハンドブック,日本生態学会編. 自然環境研究センター, 2019. 最新・日本の外来生物, 平凡社, 東京, 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

(執筆者) 細谷和海

分布図

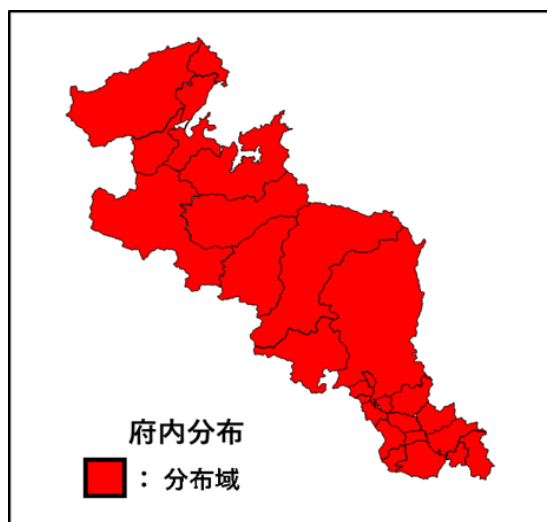


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ゲンゴロウブナ (ハラブナ)	学名	<i>Carassius cuvieri</i>	目科名	コイ目コイ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ca	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ca	原産地	琵琶湖
	導入・侵入年代	不明	導入・侵入原因	釣りの対象魚種として導入		
②分布範囲	全国	ほぼ全国的に分布				
	府内	府内各地のため池、ダム湖とそれにつながる河川、用水路等に生息し、止水域に極めて多い				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input checked="" type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	琵琶湖淀川水系の固有種で、釣りの対象魚としてため池ように品種改良が行われた系統もある。府内各地の止水域に特に多い。一部は天然分布であると考えられるが、少なくとも京都府の丹波地域から日本海側で見られる個体群は国内移入種である可能性が高い。プランクトン食性で、繁殖期は4月から6月。5-6年で体長が40cmを超える。日本産のフナ類の中ではもっとも大型となる。					
⑤近似種との見分方	体高は背鰭基底長の2.68倍、体高の2.6倍で最大40cm以上になり、日本産のフナ類の中ではもっとも体高が高く、大型化する。他のフナ類とのもっとも明瞭な判別点は、鰓耙数が100本以上と傑出して多いことである。					
⑥被害状況	在来のフナ類との交雑の可能性があり、実際オオキンブナとの交雑個体も見つかっている。また、他のフナ類やコイ科魚類と繁殖期が重なっており、産卵場所、ふ化後の稚魚の餌等をめぐっての競合の可能性はありうる。しかし、他魚種の捕食者とはなり得ないため、本種を導入して直ちに既存の生態系に強い影響を及ぼす可能性は低い。また、本種は釣りの対象と人気が高く、釣りに際しての過度の寄せ餌の使用が水域の富栄養化を起こすという二次的な環境汚染が懸念される。					
⑦必要な防除対策	無計画な導入は慎むべきであるが、本種の生息域は主にため池であるため、冬季の池干しによる個体数の調節が可能。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	谷口順彦. 1989. 日本の淡水魚「ゲンゴロウブナ」. 山と溪谷社. P.346-351. 瀬能 宏 (監修). 2008. 日本の外来魚ガイド. 文一総合出版, 東京. 159 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

(執筆者) 細谷和海

分布図



京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ヌマチチブ (京都府南部)	学名	<i>Tridentiger brevispinis</i>	目科名	スズキ目ハゼ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ba	原産地	日本
	導入・侵入年代	1980年代後半(府 南部)	導入・侵入原因	琵琶湖からの流下、外来肉食魚の餌として放流		
②分布範囲	全国	北海道から本州の河川下流域に自然分布。琵琶湖には1980年代後半に持ち込まれた。				
	府内	2005年以降、琵琶湖・淀川水系及び府南部の池で確認。なお、府下北部の河川には自然分布する（生息数の規模）普通にみられる				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input checked="" type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	汽水域から河川下流域が主たる生息水域で、小さな堰でも遡上が阻害される。雑食性で、1～3年で繁殖し、死亡する。産卵は、雄が占有した水中の転石や石垣状の構造物の隙間を使い、孵化するまで雄親が保護する。府下南部では、1960年から1980年代前半の採集記録が見あたらないことから外来種と考えた。					
⑤近似種との見分方	府下には同属のチチブ、シモフリシマハゼ、アカオビシマハゼが生息しているが、3種は汽水域を中心に生息する。チチブとは、背鰭の棘条が糸形に伸びないことと、胸鰭基部に燈色の線が入ることで区別される。					
⑥被害状況	近自然工法による河川の護岸工事などにより、産卵場所となる石垣状の構造物が増えているので、急速に増加した。繁殖場所や生息環境を奪うことで在来競合種などを減少させたり、被食者となる水生昆虫や小動物への影響が心配される。					
⑦必要な防除対策	在来種との空間を巡る競合、食性や自然増加数などの調査を行い、対応策を検討する必要がある。未侵入地域に放流しないように注意する必要がある。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	高橋さち子(1990)琵琶湖で採集されたヌマチチブについて. 滋賀県立琵琶湖文化館紀要・明仁親王(1989)チチブ類.水野信彦・後藤晃編,日本の淡水魚類 第2刷. 瀬能 宏(監修). 2008. 日本の外来魚ガイド. 文一総合出版, 東京. 159 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

(執筆者) 細谷和海

分布図



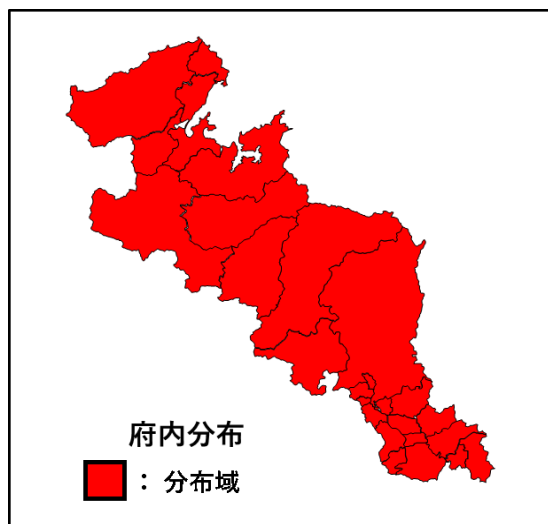


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	カムルチー	学名	<i>Channa argus</i>	目科名	スズキ目タイワンドジョウ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ca	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ca	原産地	アジア大陸東部
	導入・侵入年代	1923-1924年	導入・侵入原因	食用のため、朝鮮半島から持ち込まれた。		
②分布範囲	全国	全国の湖沼や河川の中下流部に生息。				
	府内	府内各地のため池、平野部の河川中下流域、用水路等に生息する。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input checked="" type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	上総器官を有し、酸素呼吸を行うので低酸素状態に強い。成魚の体長は1mを超える場合もある。生態系内では上位捕食者であり、昆虫類、甲殻類、は虫類、魚類等を捕食する。繁殖期は5-8月で直径1m程度の浮き巣を作り、ふ化後の稚魚の保護を雌雄で行う。					
⑤近似種との見分方	背鰭鰭条数が47-53軟条、臀鰭鰭条数が31--35軟条と近縁のタイワンドジョウよりも多い。また、体側の斑紋はタイワンドジョウよりもカムルチーのほうが大きくはっきりとしている。					
⑥被害状況	動物食性が強く、大型化すること、稚子魚を保護するという点から、繁殖力が強く、捕食による在来生物への影響は少なからずあるはずである。しかしながら、カムルチーの国内生態系への影響は移植されてからの時間が長いためか、あるいは本種の原産地には日本産淡水魚類と同種あるいは同属種が多く、被食者が本種へに何らかの対抗戦略を身につけているためか、同じ上位捕食者であるオオクチバスに比べて直接的な影響は明確ではない。また、オオクチバスの導入以後、本種の個体数は減少傾向にある。					
⑦必要な防除対策	カムルチーは府内での生息可能な水域にはすでに侵入しているため、駆除が検討される場合には繁殖期の浮き巣でふ化した稚子魚とそれを保護する親魚を捕獲するのがもっとも効果的だと考えられる。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	前畑政善. 1989. 日本の淡水魚「カムルチー」. 山と溪谷社. P.470-473.; 前畑政善. 2002. 「カムルチー」日本生態学会（編）村上興正・鷲谷いずみ（監）外来種ハンドブック. 地人書簡.p.120. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京, 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図



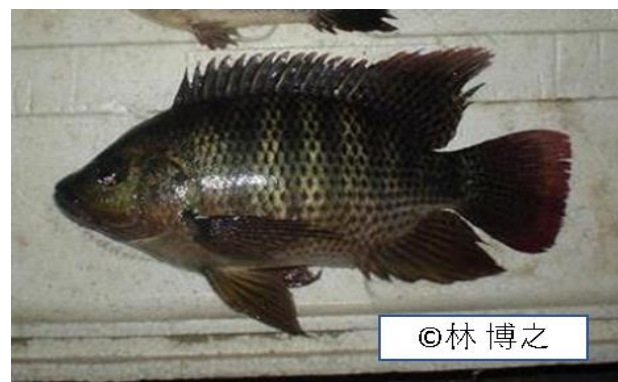


京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ナイルティラピア	学名	<i>Oreochromis niloticus</i>	目科名	スズキ目ティラピア
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Cc	国リスト カテゴリー	その他の総合対策 外来種
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Cb	原産地	アフリカ大陸
	導入・侵入年代	1962年(国内) 府不明	導入・侵入原因	養殖池からの移出、放棄の可能性がある		
②分布範囲	全国	西日本、南日本の温水地				
	府内	2004年以降では宇治川及び流域水路・池で確認（生息数の規模）越冬できるのは極少数				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input checked="" type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	生育水温は10度以上で、府下では工場地帯の温排水の流れ込む場所で越冬する。水温が高くなる初夏から秋にかけて繁殖する。雑食性で、成長は早く、等齢魚が繁殖に参加する。産卵は水底にすり鉢状の産卵床を作って行い、卵は親魚が口腔哺育する。					
⑤近似種との見分方	同科の在来種はいないが、観賞用熱帯魚として販売されたり、食用に養殖されたりしている。同属のカワスズメに比べ体高が高く、尾鰭に細い横帯がみられる。下枝鰓耙数が20から26。					
⑥被害状況	被害状況は不明。本種を含め、観賞用熱帯魚を越冬可能な温排水地に遺棄した場合、生態系や在来生物にとって脅威となる可能性がある。					
⑦必要な防除対策	在来生物への影響が心配されるので、被害の実態について知見を集める必要がある。越冬できる場所が限られるので、必要であれば駆逐することは可能。					
⑧改訂の理由	府内では散発的に採集されている。さらに10℃までの低温にも耐えうることから、継続的な観察が必要と判断する。					
⑨参考文献	波戸岡清峰・柳下直己. 2013. カワスズメ科, 中坊徹次(編), pp. 1025-1026. 日本産淡水魚検索 第3版. 東海大学出版会, 秦野. 林博之・中川宗孝. 2006. 洛南タイムス, 2006年4月19日4面. 今谷禎彦. 1980. テラピア類, 川合禎次・川那部浩哉・水野信彦編, 日本の淡水生物. 川瀬成吾. 2019. ナイルティラピア. 細谷和海(編著), pp. 366-367, 増補改訂 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

(執筆者) 細谷和海

分布図



京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	タウナギ	学名	<i>Monopterus albus</i>	目科名	タウナギ目タウナギ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Ca	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Ca	原産地	中国を中心とする東南アジア
	導入・侵入年代	1900年頃(国内) 1912年(府)	導入・侵入原因	奈良県に移殖されたものが侵入		
②分布範囲	全国	関東地方以南。近畿地方のものは移入。なお、環境省版レッドデータブック(2015)では沖縄島のタウナギは絶滅のおそれのある固有の在来個体群として絶滅危惧IA類に位置付けられている。				
	府内	2005年以降では木津川本流及び流域の水田・水路にて確認（生息数の規模）木津川流域では普通にみられる				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input type="checkbox"/> 生態系被害、 <input checked="" type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input checked="" type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input checked="" type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	水田や流れの緩やかな水路に生息する。空気呼吸を行い、泥中にもぐって、乾燥に耐える。雄から雌への性転換を行う。全長80cmに達する。					
⑤近似種との見分方	在来の近縁種はいない。体色は褐色、体型はウナギ状。鰓孔は腹面あり、尾鰭と腹鰭が無く、他の鰭も目立たないためにヘビと間違えられることもある。					
⑥被害状況	泥土に孔を掘るため、用水路や棚田状の田の水を流す被害がある。京都府南部では棚田が少なく、水路の護岸が進んでいるため、被害は少ないと思われる。					
⑦必要な防除対策	文献によると府内各地で確認されているが、現在の分布は不明なので、府下の分布状況について調査を行い、未侵入地域に放流しないように注意する必要がある。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	今谷信夫. 1989. タウナギ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）日本の淡水魚. 環境省. 2015. 日本の絶滅の恐れのある野生生物, 4 汽水・淡水魚類. ぎょうせい, 東京. 414 pp. 川那部浩哉・丸山 隆・谷田一三・富田恒男. 1974. 京都府下の淡水魚. 京都の野生動物. 京都府公害対策室. 自然環境研究センター. 2019. 最新・日本の外来生物. 平凡社, 東京. 591 pp.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）					

（執筆者） 細谷和海

分布図

